

【全体概要】 農研機構において育成された「せとか」は、高糖度で良食味であり市場評価も高く、高単価で取引されており、三重県では2014年からタイ王国への輸出も実施している。輸出相手国からのニーズも高く、産地としても今後生産を奨励していく品種として位置付けている。しかし栽培面では、日焼け果の発生等による製品率の低下や冬季の袋掛け作業時間の増加が問題となっている。そのため、日焼けを含む果実の外観阻害要因の発生を抑制する技術や省力化技術の実証を行い、JA中晩柑部会とも連携しながら露地「せとか」の生産拡大に努め、国内販売だけでなく輸出量を増加させることで、産地の主力ブランド品としての地位を確立し、産地の維持・発展に貢献する。

新品種・新技術等の概要



図 「せとか」に発生した日焼け症状



図 ネット遮光施設の設置状況

炭酸カルシウム水和剤の散布やネット資材による遮光を行い、特に問題となっている日焼け果などの外観阻害要因の発生抑制効果を実証し、製品率を向上させる。

露地栽培における早期収穫、貯蔵が「せとか」の果実品質に与える影響を確認し、早期収穫による冬季の袋掛け作業の省力化が可能か検討する。



製品率
向上

生産
拡大

輸出量
増加

主な取組内容

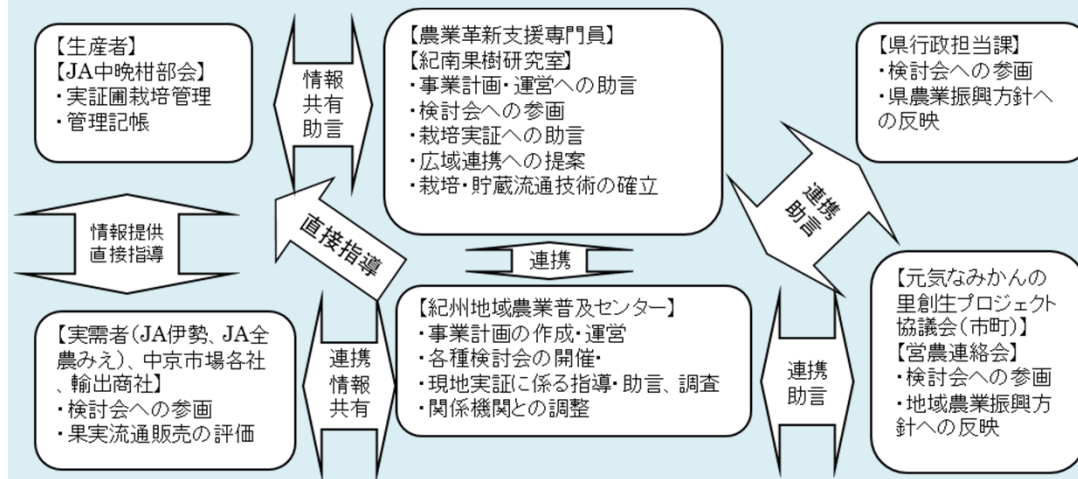
三重県におけるカンキツ産地である東紀州地域に現地実証圃を2件設置し、炭酸カルシウム水和剤散布、ネット資材による遮光等により日焼け等の果実外観阻害要因の抑制効果を比較検討、実証する。

現地実証圃の「せとか」で早期収穫、貯蔵を行い、慣行の収穫果と果実品質を比較し、冬季の袋掛け作業の省力化を検討する。

実証結果は導入コストなどもとりまとめ、技術導入にかかるマニュアルを作成し、普及拡大に努める。

実施体制図

三重県熊野農林事務所紀州地域農業改良普及センターが中心となり、各機関の調整や事業の進捗管理を行う。実需者は、量販店への出荷・販売、輸出を行うJA伊勢、JA全農みえを想定し、量販店と輸出先国での販売者ニーズを吸い上げ、普及拡大に向けた検討を行う。



実績と今後の展開

ネット遮光による日焼け果の発生抑制効果を確認できたため、引き続き施設費や設置労働時間などの導入コスト削減と、技術の更なる実証、普及に取り組む。

その他の果実外観阻害要因については、炭酸カルシウム水和剤で一部効果が確認できたため、引き続き効果の向上手法を検討する。

早期収穫、長期貯蔵については、寒波襲来時の緊急回避技術としては利用できる可能性が示唆されたため、今後の活用について検討していく。